

基本の徹底を！



早稲田大学 創造理工学部 経営システム工学科 教授
永田 靖

本学会の副会長を拝命して2年目になりました。

1年前にも巻頭言を掲載していただきました。ここでは、コロナ禍の社会において、品質管理の規範、特にトップのリーダーシップと方針管理の大切さ、全員参加と日常管理の重要性、データリテラシーの問題について述べました。

1年が過ぎてさらにわかったのは、PDCAやSDCAを回すのは難しいということです。仮説を立てるのが困難、エビデンスに基づかないでプランが決められる、チェックがあいまいで次のアクションに有効につながらない、といったことです。かけ声だけでは全員参加は実現しないことも学びました。

選択バイアス・認知バイアスという問題を深刻に感じた1年でした。これは、古くからある重要な問題ですが、昨今のビッグデータブームでより顕在化しています。科学の世界では、自分に都合のよいデータを選択することはデータの捏造・改ざんの一環とみなされます。一方、一般社会では、それが当たり前のごとく行われます。視聴者が興味を持たないニュースを流しても仕方がないからです。しかし、そこにどのような色がついて強調されているのか、客観性がどれくらい担保されているのかを常に意識していないと危険です。ユヴァル・ノア・ハラリは『21Lessons』（河出書房新社）で次のようなたとえ話を取り上げて警告しています。「毎月30ドル払いますから、その代わりに、毎日1時間、あなたを洗脳して、私の望みどおりの政治的偏見や商品に関する偏見をあなたの頭にインストールさせてください」。あなたは、その取引に同意するだろうか？正気の人なら、まず同意しないだろう。（中略）“この

サービスは無料で提供します”。すると今度は、突然この取引は何億もの人に魅力的に聞こえるらしい。」

日本品質管理学会は本年で50周年を迎えます。50周年記念行事の一環として、齊藤忠理事・古谷健夫理事・熊井秀俊理事らの献身的な努力によりキャラバン講演活動を展開しています。製造業に限らず、業種・業態をもっと広げて品質管理の普及活動を行っています。好評を得ているのですが、アンケートの一つに次の意見がありました。「品質管理が実態として概念が拡大解釈され、肝心な従来型とも言える「品質管理」が疎かになっているように見えることに危惧を感じる。これが品質不祥事にもつながっているのではないか。」私も同じことをうすうす感じていました。それを品質管理の業界とは異なる方に明快に指摘されたのが衝撃でした。また、このことが日本品質管理学会にも責任の一端があると言われているようにも感じました（ご意見を述べられた方に決してそういう意図がないのはわかっていますが……）。

今後、どのように学会活動を設計すればよいのか改めて考えなければなりません。「未来への突破口を見出すための顧客価値創造活動」「基本的な従来型品質管理の徹底」を2つの柱として、我々のエフォートを振り分ける必要があると思います。前者の柱は、昨今、議論が深められています。一方、上記の意見や冒頭に述べたPDCAやSDCAを回す困難性は、後者の柱の重要性を示唆しています。基本を徹底しなければなりません。